大蛇が加わった扶桑。少年院チームは「あいつはちゃんと手を抜いてくれるさ！」とタカをくくっていたが、大蛇は本気だった。キックをギリギリでキャッチすると、そのままカウンターアタック！！
大蛇「**俺は今、扶桑のジャージを着てんだっ！！**」
少年院ではトライゲッターだった大蛇、巧みなステップでゲインしていく。敵陣深くまでいって、ラックパイルアップ。扶桑のスクラムになった。
叶、このスクラムからネコ返りトライを狙う！！インゴール内でネコが空中キャッチ･･･！！
しかし、少年院選手が果敢に空中タックル！ネコが球を取る前に防がれてしまった。ボールは場外へ。これをみて、蓬莱校長務めるレフェリーはノーサイドのホイッスルを吹いた。
少年院の勝利･･･！？
だが、**叶がミスジャッジを指摘**した。ネコはまだボールを取っていなかったので、アーリータックルであり、反則が与えられるはずである。そして、ペナルティーキックが終了するまではプレー続行のはずなのだ。
さすがの校長も、完全に重大なミスを犯していたことに気付き、愕然とした。ところで、**アーリータックルうんぬんの以前に、空中でタックルした事実だけでも反則（しかもシンビン）だと思う**のだが、これは素人考えだろうか。それに、一度吹いてしまった笛を覆すというのも、ちょっと･･･。

ともかく、校長は今のレフェリングを撤回した。怪我人が続出するあまり、一刻も早くノーサイドになればいいという気持ちから、校長としては考えられない初歩的なミスをしてしまったのだ。しかも、ラストワンプレーであるということを両校に教えてしまった。これは扶桑にやや有利になってしまう。だが、サブは「反則をしたのはわいらチームだし、ワンプレーを教えてもろうたのも、扶桑にだけ有利とは限らない」と、これを快く許容した。
冴木「あいつはもう立派なラガーマンです！！」

改めてラストワンプレー。叶は同点狙いではなく、‘勝つ’ためにスクラムを要求した。
叶は両 CTB をもスクラムに入れて、10 人 vs8 人のスクラムトライを狙う。サブも本気で踏ん張る。サブ強い！スクラムは動かず、崩れてきた･･･。だが、BK を二人スクラムに入れている以上、オープン展開してもトライは取れない。
スクラムが完全に崩れてラックになった！まずい！叶は、**みずからラックから球を取り出し、振り向きざまにドロップゴール！入った！**
これで 34-34 の同点でノーサイド。

仲間からブーイングをうける叶だが、
叶「たしかにドロップゴールじゃ勝てない･･･しかし、負けるわけにもいかなかったからだ！」と、**定番の行為解説**。
だが、それならはじめからペナルティキックを狙えばよかった話である。まだ無念そうな、扶桑メンバー達。
だが、叶はサブに持ちかけた。**普通なら、「両者優勝」になるところだが、これは「おれたちの大会」である**。
サブ「決着がつくまでやるしかないやろ！そこがノーサイドちゅうわけや！！」
叶「そうだ！どちらかが得点するまで試合続行というわけだ！！」
お互いの思惑は一致した。いろいろあったが、結果的にはイーブンの状態から振り出しに戻ったのだ。ここからサドンデスマッチ！

サドンデス形式の延長戦が始まった。
いっそう、激しさを増す試合。扶桑はペナルティゴールを狙える位置でも、スクラムを要求。空気の読めない少年院 SO がドロップゴールを狙うと、サブが味方の球をチャージした。
そう、**お互いにトライで決着をつけようと思っている**のだ。

さぁ、敵陣で扶桑が反則を得た。ここで叶の選択は･･･**アマゾネス！！**
得意の攻撃で、勝負を決しようとするが･･･少年院は、天生率いる亢竜と同じように、全員参加防御で防ぎにかかった。

なんと、これまで**無敵を誇ってきた扶桑のアマゾネスは止められてしまった！**

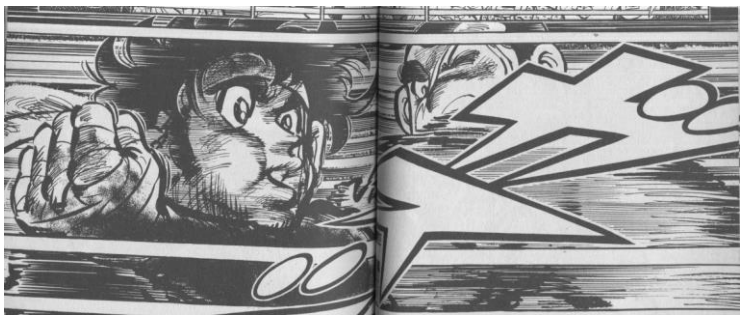
だが、サブはこの密集で左腕を完全に骨折してしまったようだ。だが、医者を払いのけるサブ。無理せずリザーブを出すように諭す叶に、
サブ「お前の言い方を借りれば、わいに死ねっちゅうんか！？これくらいで死んどったら…わいが殺してしもうた連中にあわせる顔がないやろ…！！」
もちろん、殺してしまった連中とは、清水・ミケ・浩のことである。

サドンデスの延長戦に入り、ほぼ１試合分の１時間が経過した（笑）。
サブのタックルを受け、叶もかなり足を痛めてしまったようだ。やむを得ず伊達を SO にして、自分は FB に下がった。目立ちたがり屋の叶のことだから、これはかなり酷いのだろう。両校、かなり限界にきている。

ここで、敵陣で、少年院が反則。叶はイチかバチかの作戦に出た。「あれはまだ未完成だ」と尻込みするメンバー達。だが、もう限界が迫っている以上、それに賭けるしかない。
扶桑がとった布陣は･･･！

アマゾネスと全く逆の布陣だった。少年院は、ともかく各自対面の DF についた。
そして先頭のチョン蹴りから**一丸にならずに突進！！**そして素回し！！
一人がタックルを受けると同時に次の一人に球を離す。まさに互いに一人一殺だ。
白鷺＆岡部「**アマゾネスが全員参加の FW プレーなら、これは全員参加の BK プレーだっ！また玉砕戦法にでやがった！！**」
そして、一番外に立っていた叶に球が渡る！！少年院が残す最後の一人はサブ！！

1 対 1 であいまみえる叶とサブ。傷めた右足でバランスを崩す叶。止む無く、右へ体を沈める。そこへサブの左腕のラリアット･･･！！



ハイタックルだろ。
だが、サブの左腕は扶桑の選手達が蓄積させてきたダメージを、ついにこらえきることができなかった！

叶は、サブの腕をへし折ってそのまま突破！だが、そこで力尽き、あとゴールまで 30cm のところで倒れこむ。
天生「叶ォ！！あと一息だァ！」
冴木「サブ～！立てェ！叶を押さえるんだァ！！」
日輪「叶くん、もう少しよ！！がんばってェ！！」

サブも苦しみながら立ち直り、叶を押さえようとするが、なんとか叶が地を這ってトライ！！ついに、サドンデスマッチはここに終止符が打たれた。

少年院 34-38 扶桑。**扶桑、優勝！**

ちなみに、叶は倒れこんだ時点で球を落としているのだが、ノックオンは取られていない。つまり、その**直前のサブのハイタックルに対して反則アドバンテージが取られていた**ということだろう。**案外、芸が細かい**（？）。だが、叶が左腕をへし折って最後のトライを取ったのは、まさに怪我で離脱した人間も含めて、扶桑全員で取ったトライといえるだろう。

この闘いは、テレビ観戦をしていた多くの者の心に火をつけたようだ。
ここに、全ての激戦を終えた「おれたちの大会」。
閉会式はない。グラウンドには、ジョン・白鷺・岡部・天生のみ。主役達が全員、病院送りになったからだ。優勝旗は、まだ叶の胸の中というわけだ。
そこへ記者の達磨さんが来て、視聴率が途中から甲子園を抜いた旨を伝える。だが、
天生「そないなもん、わいらに関係ないで！！**俺達は俺達のためにやったんや！！誰の手も借りずに俺達の手だけで･･･‘おれたちの大会’が持ってた意味はそれだけだったんや！！**･･･と、叶がおったらゆうてたとこやな！！」
達磨「ええなァ･･･最高やで、おまえら！！」

ところかわって、病院。サブと叶は着の身着のまま、そして自身のケガなど意に介せず、浩の手術が終わるのを待っている。浩の父は「**浩が本当に死んだとしても、君たちに感謝する**」と言ってくれた。
浩パパ「男としてあんなに素晴らしい死に場所を･･･浩に作ってくれた君たちに礼を言う。**わき目もふらず、精一杯何か一つのことに打ち込む･･･それが若い人の特権だ！それを持てる人は幸せだよ･･･今の若い人の多くが、その権利を放棄している･･･若い時は二度と戻ってはこないというのにね･･･**でも、浩は確かに打ち込むことが･･･燃えることができたんだ！！」
オペ室から、医者が出てきた。なんとか命はとりとめたようだ。緊張の糸が切れ、その場に倒れこむ叶とサブであった。

その夜、グラウンド横の土手にて。
冴木「負けたぜ、叶･･･！とうとう俺もお前を倒すことはできなかった！」
いや、それはハナからわかっていたが。

そして、一方のグラウンドの中央には日輪ちゃんがボールを置き、
日輪「このボールが‘おれたちの大会’の全試合を、最後まで見届けてきたわ･･･みんなの気持ち全てをこのボールが知っている･･･皆最後まで立派にやりとげたわ！浩くんだって最後まで頑張りとおした･･･ありがとう！」

陰からそれをみて涙する冴木監督であった。